

物語「夜の寢覚」の虚構性

——中の君出産のプロセスを巡って

松田早苗

序

石山の地が初めて物語「夜の寢覚」に現れるのは、中の君が男主人公との不義の子を出産する場面である。さらに読み進めていくと、石山の地はいずれも中の君の出産にまつわる土地として登場している。宮中將と新少將との、恋愛の場として登場する場面もあるが、あくまで「夜の寢覚」の主流は、中の君と男主人公との恋愛であり、石山は、中の君の出産からむ場所として採用されている。

さて、ここで筆者は、一つの疑問を感じた。「夜の寢覚」の作者（通説により菅原孝標女と考える）は、出産の地としてあ

えて石山を採用しているが、果たして臨月間もない中の君が、石山まで行くことが現実的なことであろうか。一口に京都から石山といっても、今日のように便利な交通機関を利用して、すぐにとりわけにはいかない。当時の身分ある人の交通手段としては、主として牛車であった。牛車に揺られ、山を越え、何時間もかけて行くのである。例えば、「源氏物語」宇治十帖では、宇治が主な舞台の一つとなり、それにつれて京都と宇治を往来する機会が多くなる。以前、私は実際に京都から宇治を徒歩で移動を試みたことがあった。東山と鴨川の間を深草よりも南下し、大亀谷から六地藏・木幡に至るといっは当時のルートと思われる経路を歩いたところ、約三時間かかった。その日は、雨降りでもあって、疲労は相当なものであった。京都から

宇治まででさえ、これだけの時間と労力を要した。これから考えると、京都から石山までは想像もつかないほどの時間と労力を要したのではないだろうか。

では、原文の表記は「と」といって、詳しいことは何も書かれていない。

率てたてまつりたまひつ（夜の寝覚・巻二・一二七頁）
と、一行にも満たない簡潔な文章である。日記や紀行作品と違って、物語には、詳しい移動の距離や、時間が書かれることは少ない。

そこで、私は、原文には書かれていない京都―石山間の距離や時間を詳しく読み取ることから始め、果たしてその移動が可能か、中の君の肉体状況、精神状態をも考え、最終的には、作者である菅原孝標女自身の体験等をも併せ考えながら、石山での中の君の出産についての記述を分析、検討してみたい。なお「夜の寝覚」の本文引用は、鈴木一雄氏『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠る。

第一章

まず、中の君はどういう道筋で、石山へ移動したのかを考え

る。この当時、今でいう詳細な道路マップが残されていないため、京都から石山への明確な道筋、距離および移動時間を、正確に知ることは困難である。ゆえに『夜の寝覚』本文や他の日記、物語等から、推定を試みる。まずスタート地点の確定であるが、中の君の住居は、

物間はせたまふに、「所さりては、よかりぬべし」とのみ占ひ申せば、故上の領じたまひし所、一条なるが、少し荒れたるを、にはかに修理しつくろひて、渡したてまつらせたたまふ。
（夜の寝覚・巻二・一三四頁）

とあるから、一条の故母上所有の邸である。つまり、中の君の病氣（実は懐妊）回復のため、九条別邸（男主人公との密通事件のあった場所）から転居したのである。さすがに一条の何丁目番地に邸があったのかまではわからないので、一条周辺からのスタートとする。では、ゴールはというと、

「この御心地の、かくのみはべるを、物間はせはべれば、石山に籠りて、いとよし」と申す。こころ思ひ残すことなき御祈りの、しるしありとも見えはべらざるを、さてや心みたまふべき」と申したまへば、

（同・巻二・一二六頁―一二七頁）

と、病氣平癒の祈禱を口実にして、密かに出産することを計画

し、いったん石山寺へ向かうのである。その後、

宰相中将、「乳母、石山のわたりに領する所に、をかしき
小家造りて、兄も、その寺の別当にてありければ、この
二年ばかり、尼になりてそこに入り居たるが家こそ、い
かなりとも、見る人あるまじく、よけれ」とおぼし出づ
るも、

(同・卷二・一二六頁)

とあるように、実際は、石山寺から兄の縁である尼君の小家に
隠れる。ただ、尼君の小家がゴール地点となるのだが、その判
然とした所在地は不明。そこで、ゴール地点を一応石山寺と仮
定する。

スタート地点とゴール地点が定まったところで、一条から石
山寺までの詳しいルートを、残念ながら「夜の寝覚」に書かれ
ていない以上、便宜的に概略のルートを社会地図(京阪神地区)
により推定してみる。

地図により鳥瞰してみると、京都と、石山のある近江とは、
山科を中間部として、おのおの山谷部で隔てられている。一般
的に、交通路は平野部を通るのが普通であり、また山間部は沿
面距離が最短となるように形成されていたものと思われる。こ
のため京都から山科へは、智恩院の辺りから粟田山付近を通っ
て縦断し、また山科から近江へは逢坂の関を越えていったもの

と推定される。かかるルートの確証を、平安朝の日記や紀行文
などのなかから引き出すことを試みてみる。まずは菅原孝標女
作「更級日記」の中で、石山は、「物語での記」に登場する。

霜月の二十余日、石山に参る。雪うち降りつつ、道のほど
さへをかしきに、逢坂の関を見るにも、

(更級日記・三四〇頁) 一

まず逢坂の関を通ることが分かり、さらに、

関寺のいかめしう造られたるを見るにも、(同・三四〇頁)

打出の浜のほどなど、見しにも変はらず。(同・三四〇頁)

から、道中は関寺、打出の浜を経出したと思われる。関寺は逢
坂の関のほとりなので、逢坂の関通過の際に見たと考えられる
が、打出の浜は、逢坂の関から石山へのルートとしては大きく
北に迂回することになる。これは当時の交通ルート上、打出の
浜が東国や北陸路への要衝であったからと考えられる。「更級
日記」からルートを割り出すキーワードは、「逢坂の関」と「打
出の浜」の二つで、残念ながらこれ以上の具体的な描写はなさ
れていない。

さて、「和泉式部日記」の場合、作者は帥宮の訪れが疎遠と
なり、「つれづれ」を慰めようと石山へ向かうが、やはり「逢
坂の関」を越える。また、

憂きによりひたやごもりと思ふともあふみのうみは打ち出
てを見よ。
(和泉式部日記・四五頁)^註

の歌から、「打出の浜」は「近江の湖」すなはち「琵琶湖」の
湖畔にあると推定される。しかし、「和泉式部日記」における
石山詣での一段は、宮と作者との歌の贈答でそのすべてが終わ
るので、これ以上の詳しい道筋を引き出すことは難しい。

それに比べ、「蜻蛉日記」の石山詣での一段は、かなり詳し
い道筋や、石山寺周辺の自然描写もなされている。

賀茂川のほどばかりなどにて、

(蜻蛉日記・中巻・二〇四頁)^註

粟田山といふほどにゆきざりて、
(同・中巻・二〇四頁)

山科にて明けはなるるにぞ、
(同・中巻・二〇四頁)

から、「賀茂川」、「粟田山」、「山科」を通過することがわかる。
その後、

関うち越えて、打出の浜に死にかへりていたりたれば、先
立ちたりし人、舟に孤屋形引きてまうけたり。ものもおお
えずはひ乗りたれば、はるばるとさし出だしてゆく。

(同・中巻・二〇六頁)

とあるので、「逢坂の関」を越え、「打出の浜」から舟に乗って
石山寺へ向っている。しかし、注意しなくてはならないのは、

ただ走りてゆきもてゆく。
(同・中巻・二〇四頁)

とあることから、どうやら「打出の浜」までを徒歩で移動し、
それから先は、先ほども述べた通り舟で石山寺へ向かっている
ことである。中の君の石山への移動手段は、彼女が妊婦であっ
たことから、徒歩であったとは考えにくい。彼女は身分ある女
性だったので、牛車移動と考えるのが妥当であろう。そうなる
と、「打出の浜」からの道のりを考えなくてはならないのだが、
石山寺は瀬田川沿いに位置しているので、単純に瀬田川を舟で
下るかわりに、瀬田川沿いの道を牛車で下ったものと考えられ
る。詳しい道筋がわかったところで、距離および時間について
考察する。これまで述べてきたように、京都から石山までのルー
トは、

(ア) 地図上の直線距離、約七キロメートルの粟田山越えを
する京都から山科ルート

(イ) (ア)とおなじような平野部と山間部を移動する地図
上の直線距離、約六キロメートルの逢坂の関越えの
山科から打出の浜ルート

(ウ) 琵琶湖畔から瀬田川沿いに歩を進めた打出の浜から石
山寺コース

の三コースから構成されよう。「夜の寝覚」に、男主人公が、

中の君の身を案じて、石山へ忍んで行く場面に、京都から石山までの距離や時間に関する唯一の記述がある。

日うち暮るるほどに、京を出でたまひて、月もいとかすかに、道たどたどしきを、心のゆくにまかせて、夜うち更くるほどに、石山に参でて、(夜の寢覚・巻二・一二九頁)

この表現によれば、日暮れ(午後六時頃)に京を出発、夜更け(午後十時頃)に石山に到着しており、移動時間は約四時間である。しかし、当時、身分ある人のお忍びは、馬でのケースもあることから、中の君の移動に関する有効な情報にはならない。ただ、京都から石山までの距離および時間を推定できる記述が「蜻蛉日記」にある。

明けぬらむと思ふほどに出で走りて、賀茂川のほどばかりなどにて、いかで聞きあへつらむ、追ひてものしたる人もあり。有明の月はいと明けれど、…(中略)山科にて明けはなるるにぞ、いと頭証なるこちすれば、

(蜻蛉日記・中巻・二〇四頁)

から、七月下旬頃、京都を、夜が明けそめたかと思われる時刻(午前四時過ぎ頃)に出発し、山科には、夜がすっかり明けた時刻(午前六時過ぎ頃)に到着していることがわかる。また石山寺への到着は、

申の終はりばかりに、寺の中につきぬ。

(同・中巻・二〇六頁)

とあり、大体、夕方の五時から六時頃に到着したと思われる。以上のことから判断すると、移動に約十三時間前後かかったことになるが、

かろうして行き過ぎて、走り井にて、破子などものすとて、暮引きまはして、とかくするほどに、

(同・中巻・二〇五頁)

と、途中での休息や幕を張っての食事時間をも含んでおり、また打出の浜からは、

打出の浜に死にかへりていたりたれば、先立ちたりし人、舟に菰屋形引きてまうけたり。ものもおぼえずはひ乗りたれば、

(同・中巻・二〇五頁)

により、舟での移動であることもわかり、さらに、途中他所に寄港した等については不明である。石山からの帰途については、明けぬといふなれば、やがて御堂より下りぬ。まだいと暗けれど、…(中略)乗らむとする舟の差掛のかたへばかりに見くたされたるぞ、

(同・中巻・二〇九頁)

と書かれ、明け方の四時から五時頃、石山を出発し、京に巳の時ばかり行きつきぬ。

(同・中巻・二二〇頁)

と記すゆえ、京都に午前十時頃到着しており、復路は六時間の旅となっている。さらに、

さて、ありし浜辺にいたりたれば、迎への車まで来たり。

(同・中巻・二二〇頁)

と、この行程での打出の浜から京都間は牛車であり、往路の一三時間とは大きな差を生じる。この二つのデータでは京都から石山までの牛車での移動時間の推定は難しい。そこで、京都から山科間の徒歩での行程から、実際の移動距離をまず推定し、それによって、牛車での移動時間の推定を試みてみる。

前述のように、京都から山科までを約二時間程度で移動しているが、京都から山科の具体的な地名が不明のため、おのおのの中心部を仮定する。地図上では直線距離にして約七キロメートル、人間の歩く速度は建設省通達で毎分八十メートルと示されているので、この数字を採用して、京都から山科までの実質的な移動(沿面)距離を計算すると、二時間×八十メートル÷九・六キロメートルとなる。ここで直線距離と実際の移動距離(沿面距離)との割合を沿面係数と呼ぶこととし、京都から山科間では九・六キロメートル÷七キロメートル＝一・四となる。

また前述のコース(イ)は、地形上(ア)と同じような状況

とみなせることから、その実際の移動距離は、六キロメートル×一・四(沿面係数)＝八・四キロメートルと推定される。最後にコース(ウ)は、その当時、琵琶湖および瀬田川沿いには舟での航行と、要所での寄港地が想像されることから、琵琶湖畔および瀬田川沿いに道路が形成されていたものと思われる。これにより、地図上での琵琶湖畔沿いから、瀬田川沿い經由石山寺にいたる距離を測ると、約九・二キロメートルとなる。以上より京都から石山までの実際の移動距離は約二十七キロメートルと推定されよう。

次に移動時間だが、牛車での速度を、先ほどの人間の平均的歩行速度、毎分八十メートルとすることは現実的でない。具体的なデータは本文に見出せないが、その移動速度は、乗員の君の身体状況により、制限されたものと考えるのが妥当であろう。現在の自動車のような、防振機能を持っていない当時の牛車では、整備されていない路面からの振動や、牛車の一メートル以上の地上高さゆえの揺れ等による、外的ストレスは相当大きいものと想像できる。いま、人間の歩行速度で移動したと仮定すると、約二十七キロメートル÷八十メートル＝五・六時間となるが外的ストレスはかなり大きなものとなる。

振動エネルギーは、速度の二乗に比例する。振動や揺れ等の

外的ストレスを一桁下げたため、速度をほぼ三分の一とした場合、移動時間は十六・八時間となり、今度は閉ざされた牛車に長時間拘束されるストレスでの疲労が問題となる。いずれにせよ牛車の速度は、外的ストレスや拘束ストレスを考慮した速度となり、移動時間は十数時間であろうと推定される。いままで考察してきたことを整理すると、次のようにならうか。

・ 京都から石山寺までの移動は、粟田山越え山科経由の後、逢坂の関を越えて、遠回りとはなるが、打出の浜へ下り、そこより、琵琶湖畔を越えて瀬田川沿いに、石山寺に至るルートと考えられる。

・ 牛車での移動であり、幾つかの仮定のもとに推定した移動距離は、京都一条から山科まで約九・六キロメートル、山科から打出の浜までが約八・四キロメートル、そしてそこから石山寺までが約九キロメートル、合計約二十七キロメートル、また移動時間は外的ストレスもしくは拘束ストレスとの兼ね合いになるが、いずれにしろ十数時間と推定される。

(注1) 大養廉『更級日記』新編日本古典文学全集(小学館)に依る。

(注2) 藤岡忠美『和泉式部日記』新編日本古典文学全集(小学館)に拠る。

(注3) 木村正中『蜻蛉日記』新編日本古典文学全集(小学館)に拠る。

第二章

石山までの詳しい道のりがわかったところで、次に、中の君の肉体状況、精神状態について考えたい。中の君が、石山に移って出産することとなった理由は、男主人公との不義の子を、周囲の人に気づかれぬように産まなくてはならなかったからである。両者の密通事件は、ある年の七月十六日だった。

三月二十五六日のほどなれば、三七日と限りて、「さりととも、そのほどにはあらじやは」と思ひて、半てたてまつりたまひつ。(夜の寝覚・巻二・一二七頁)

とあることから、石山に移ることとなった時、中の君は妊娠八ヶ月だったことがわかる。その上、

姫君は、ただ「いかで、骸をたにとどめず、なくなりなむ」とのみおぼし入るに、いとみじく堪へがたく、弱げになりまさりたまふに、(同・巻一・一二〇頁)

と、命も危ぶまれるほど、衰弱している状態だった。そこで、中の君の肉體状況を、より詳しく理解するために、当時の出産について考えておきたい。新村拓氏「出産と生殖観の歴史」(註一)によると、

出産にともなう死亡が多かったせいで、前近代社会での女性の死亡年齢は男性のそれに比して低く、服部敏良氏によれば、平安貴族の死亡年齢が六〇・〇四歳であるのに対して、同女性のそれは五二・三歳とあり、また、梅村恵子氏によれば、平安後期の歴史物語である『大鏡』に登場する人物の死亡年齢は、男性が五六・五歳であるのに対して、女性は四八・八歳とある。…(中略) 出産は常に死と隣合わせの状態にあり、『平家物語』巻九には「をんなはさやうの時、十に九つはかならず死ぬるなれば、恥ぢがましきめを見て、むなしうならんも心憂し」と、女性は出産のとき十に九は死ぬものというから、出産のために恥ぢかしい目にあつて死ぬというのもいやなものである、とした本音ともいえる言葉も見られる。

以上からわかるように、当時の女性にとって、出産は、みずから生命をかけた大仕事であった。出産によって死没した例を史上に見ると、村上天皇中宮藤原安子、一条天皇皇后藤原定子、

小式部内侍等々その数は決して少なくない。また、物語の世界においても、宇治の八宮の北の方、源氏の正妻葵の上など、出産に対する様々のリスクを背負っており、石山に移って出産することとなった中の君は、その何倍もの肉體的リスクを背負うことになったはずである。

当時の、出産による死亡率の高さは、当然医学的な対応の遅れによるものであったと考えられる。では、中の君が石山への移動中、彼女の身体に起こりうるであろう妊娠による異常、または病氣について考えたいと思う。前述した通り、このとき中の君は妊娠八ヶ月であった。妊娠八ヶ月というと、この頃から妊娠中毒症が出やすくなり、胎位の異常などが現れるようになる。妊娠中毒症(これから説明するのは後期妊娠中毒症のことを指す)とは、妊娠の後半期に入つて、浮腫、蛋白尿、高血圧の三つを主な兆候とする症状で、重くなると、ときに子癇と呼ばれるひきつけの発作をおこすことがあり、その他肺水腫、正常位胎盤早期剥離など、妊産婦の生命をおびやかすような症状をひきおこすこともある。わが国の妊産婦死亡の約四〇％は、この妊娠中毒症によるものといわれ、妊娠後半期に入れば、日常生活の摂生に注意して、普段の家事や軽い散歩はしても、過労に陥入るようなことや、身体の無理な姿勢を続ける仕事など

は、避けなければならない。また、この時期から早産の可能性も出てくる。早産の原因として、先ほど述べた妊娠中毒症や、多胎妊娠、子宮の異常、そして生活環境の影響などが上げられる。あくまで可能性の問題だが、安静には十分に注意しなくてはならない。しかし、当時の牛車の車輪は木製であり、現在の自動車のような吸振機能や制振機能もなく、このため路面からの振動や、揺れ等の外的ストレスや、牛車内に閉じ込められ、身動きが拘束されることからくるストレス等の疲労は、相当のものであったろう。このように、中の君には妊娠中毒症や早産の原因になる要素が揃っていたのである。

以上のことから、中の君の肉體状況はかなり危険な状態にあり、さらに、長時間牛車に乗って移動することは、肉体的にかなりのリスクを伴うことがわかった。さらに、肉体的ダメージは、精神面からの影響によるものが大きい。知られるように、中の君が懐妊の子は、男主人公との不義による。出産が常に死と隣り合わせであった当時の女性にとって、妊娠中の不安や恐怖がはかり知れないものであった上に、彼女が産もうとする子供が、実の姉の夫の子供であった。彼女の精神状態は、いかばかりであったろうか。密通事件から出産までの、中の君の苦悩は、かなり明確に記されている。

かの姫君、恐ろしくいみじとおぼしけるに、やがてまどひ
たちける御心地、日を経て、いといみじく苦しげにのみ
なりまさらせたまへば、
（夜の寝覚・巻一・四八頁）
密通事件の夜の、あまりの恐ろしさから、そのまま心の病をわ
ずらってしまう。それからというものは、

胸あく世なく、そら恐ろしくのみおぼしくだけたるさま、
いとあはれなり。
（同・巻一・五三頁）

と、心の暗れる間もない状態である。その後、

姫君は、このこと聞きたまひてし後、恐ろしく、悲しくお
ぼされて、「骸をだに残さず、この世になくなりなばや」
とおぼし入るに、月ころ弱りくつほれたまひぬる心地、ま
たあやまりて、音をのみ泣きつつ、頭ももたげたまはず、
御帳のうちに沈み入りたまへれば、さぶらふ人にも、起き
上がり見えたまふこともなし。

（同・巻一・六一頁〜六二頁）
と記されるように、中の君側近の侍女である対の君から、密通
の相手、すなわち不義の子の父親は、実は姉の夫であるという
真相を告げられ、衰弱しきった心に追い討ちをかけ、状態はさ
らに悪化する。目を重ねることに人目にもわかるほどお腹がふ
くらみ始めると、

第三章

姫君は、月の重なるままに、醒なき御身は、いちじるしくふくらかになりもておはするままに、せむかたなくおぼし呆れたり。

(同・卷二・七八頁)

「見咎めたまふ人もや」と、我が心の鬼に恐ろしくわりなければ、伏目にのみおぼされて、人々の見たてまつりたまふをいと苦しくおぼさる。

(同・卷一・八二頁)

と、自らの身体の変化と、周囲の視線に苦しめられるようになる。さらに、姉に対する良心の痛みまで加わって、今にも絶え入りそうな状態となる。太政大臣を父に、帥の宮の女を母にもつ中の君は、早くに母を亡くし、父の手で大切に育てられてきた。

「めづらかに、ゆゆしうかなし」

(同・卷一・一七頁)

このように、目の中に入れても痛くないほどのかわいがりようであり、彼女はいわゆる深窓の姫君だった。こうした中の君にとって、「密通」、「不義の子妊娠」という事実は、あまりに残酷なものであった。

(注一) 新村拓『出産と生殖観の歴史』

(財団法人法政大学出版局、一九九六年一月三十一日刊)

第一章、第二章から、中の君が京都一条から近江の国の石山寺までの行程を、たとえ牛車に乗っていたとはいえ、移動したとすることは、物語の構成上かなり無理があるといえよう。まず、物理的な可能性の問題である。京都―石山間は、確かに地図上の直線距離では十数キロメートル、普通に歩いて数時間の距離である。しかし、第一章で述べたように、当時の交通路を日記より推定した結果、実際の移動距離は直線距離の二倍以上の二十七キロメートル前後となり、妊婦を乗せた牛車の現実的な移動時間は、約十数時間の道のりであると推定され、また、途中の食事や休憩時間を考慮に入れると、相当長時間の旅となる。もちろん、この移動時間は、前述のような仮定のもとに計算したものであり、かなりの誤差を含んだものではあるが、いずれにしろ十数時間の移動となり、路面よりの外的ストレスおよび拘束ストレスによる肉体的、精神的疲労は相当厳しいものとなることは、容易に想像できよう。

また、当時の栄養状況や、産婆等の医療状況が、現在のものと比べようもない状況下では、流産や死産、あるいは本人そのものへの生命の危機が予測されるなかで、臨月の近づいた中の

君をして、あえて石山行きを敢行させることは常識的には考えにくいといえよう。さらに、「更級日記」のなかで、

その五月のついでに、姉なる人、子生みて亡くなりぬ。

(更級日記・三〇五頁)

という記述からわかるように、作者の妻の姉は出産後、産褥で死亡している。このように、身近な人の産褥による死という、妊婦にとってもっとも危惧すべき経験を持ちながら、自作のなかで、あえて中の君を石山に移して出産させる——という記述は、物語の虚構性というものの、いささか常軌を逸しているのではなからうか。

結び

第三章で、中の君の石山行きは、現実には物語の展開上、物理的・医学的観点からは、理解できない行動であるという「解答」を出した。しかしながら、なにゆえ作者は、物語作家として、あまりにも非現実的な組み立てを、この作品のなかであえて取り入れたのであろうか。まず、思い浮かぶのは、やはり中の君恋慕に堪えかねた男主人公が、焦慮の末に石山に忍び、ほとんと生死の境にある中の君と再会する場面についてである。

石山へ移った中の君は、今にも息絶えそうな危険な状態であり、無事出産出来るかどうかも危ぶまれていた。中の君を取り巻く人々は嘆き悲しみ、悲嘆にくれる毎日であった。そこへ男主人公の登場である。身分ある男主人公が、かなりの無理算段をして、やっとの思いで京の都から石山にたどり着くわけである。読者にとって、主要人物の男女二人が、遠く離れた状況に置かれていることは、それなりに物語のドラマ性を盛り上げよう。この時、遠く離れた場所が石山である必然性はないが、かつて作者はこの地を何度か訪れており、執筆の構想の底流として、無意識的にも石山へのイメージがあったのかも知れない。「夜の寝覚」作者といわれる菅原孝標女は、元来、虚構性の高い作者とされ、「更級日記」自体、あくまで読者を意識した作品で、その内容には、事実と虚構が巧みに交錯されていることは常に説かれるところである。「夜の寝覚」中の君の石山行きも、作品のドラマ性を高め、読者の期待感を、暗黙のうちに高揚させることを意識したものと推測され、はからずも、孝標女自身の、虚構性の高い作家としての一面を示しているものと思なし得ようか。